

帰国かと心弾んだが、非情にも列車は西へ西へと走り、バイカル湖、ウラル山系を越え、遠く東欧の都市ウファ収容所に送られた。ここでは人道的に寛大な扱いを受け、思想的な強制も洗脳もされず、民族的な偏見のない人々の心温まる好意にも接し、三年の歳月を平穏に暮らすことができた。そして昭和二十四年、長く辛かった茨の道を越え、鶴が舞うという祖国の岸壁に上陸することがかなえられ、七月二十四日、八年ぶりに松江駅頭に降り立ち、家庭や懐しい人々に迎えられ、再会を喜び合った。ちょうどこの日は天満宮の夏祭で賑わっており、子供時代の楽しかった思い出もよみがえった。

生き残った老兵は想う「不戦こそ人類幸福の礎である。悲惨な戦争体験を後世に語り継ぎ、二度と過ちを繰り返さぬための由もがなともなれば幸いである」。

シベリア抑留体験記

岩手県 金野秀雄

収容所まで二か月余

終戦を知らずに戦った私たちは、昭和二十年八月二十九日、音徳爾で武装解除となった。

早速ソ連兵の監視でダワイダワイと追いたてられながら放浪の旅が始まったのである。

食糧も支給されずの野宿である。約八千人の部隊であり、食糧調達でたちまち四五キロ四方の畑作、馬鈴薯、玉葱、人参、玉蜀黍等は皆無となる。二三日すると再び移動する。六〇七回繰り返し返して九月末日頃にチハルの旧兵舎に宿ることができた。移動を繰り返すたびにソ連兵による略奪が行なわれ、時計はもちろん万年筆、金銭、果てはベルトまで奪われたのである。

その光影は言語に絶するものであった。山羊や羊が放牧地で追いかかわれている様子に似ている。チハルの兵

舎は既に、ドイツ軍兵士が抑留されており、高さ二メートルほどの有刺鉄線の鉄柵、さらに内外に一メートルくらいと五十キロほどの鉄柵が計五重に張り巡され電流が通されており、四角に高々と建てられた監視所からは照明燈で絶えず照らされる。極悪人その者の収容所となっていた。外部から投げ込まれた黒パンの一片を拾おうとして柵に近づいて射殺された戦友を目撃したが、どうにもならない。「終戦後もなお我々に抵抗したファシストは許せない」とソ連軍の将校が吐き捨てるように言った言葉は私の脳裏から今でも消えない。

日本に帰れるそうだという話がささやかれるようになって間もなく、毛布二枚を含めて被服類が渡された。防寒用外套、帽子、靴等、どう考えても日本に帰る準備ではない。帰国にわいていたのが極度に不安と憤懣やかたなしの様相に一変したのであった。

有蓋車を杉丸太の支柱で二段にし、中央開きの貨車なので、前後一段に一個分隊ずつ、従って四個分隊のスジ詰めである。中央部にはストープが置かれてはあるが、薪が少ない。

その隣りにドラム缶を半分にした用便器が置かれている。車内に臭いが充満する。窓がないから暗く、外の様子は全くわからず、どの方向に走っているか知ることまでできなかった。略奪によって時計もないから時間もわからない。列車が停車するたびに食糧受領の連絡を待つ、これが一番楽しみであった。引込線に入っただけの食事、黒パン三百五十グラムと若干のスープである。臨時列車であるため、引込線からなかなか出られない。これは後でわかったことだが、ダイヤとは関係なく食糧補給によるものであった。大豆、豌豆、燕麦が支給され飯盒水たきし、二日近くも停車していたときもあった。満州里を通り過ぎ、チタ駅に向かって途中に列車が止まったと思ったなら、バックを始め二、三分したら停車した。何か事故でもと思ったら、突然下車せよとの命令である。なんのことはない、それはどの勾配でもないのに上れなかったのである。ソビエトらしいと思った。列車を全員で押し上げたが、将来にわたって経験のできない珍事である。木製の貨車が前後左右にギシギシと絶えず揺れ動く。突然十二人寝込みのまま上段が落下した。下段にい

た戦友のうち二人が杉丸太の直撃を受け、残酷にも死亡した。

途中でソ連兵に運び出されたがどうなったのだろう。そのときは既に雪が大分積もっていた。そのまま放り捨てられたのではないかと話し合った。チタ駅に着いたのは翌日の夕方と記憶している。支線二つか三つ目の駅で下車した。ジブヘーゲンである。駅の附近には人家はまばらに転在していた。約一メートルぐらいの積雪を踏みながら、また監視兵のダワイの声に追い回されて歩き出した。山を越え、谷を渡り、道路といえる道ではない。夜を徹しての歩きは飢餓と寒さと不安にかられ、疲労が重なってだれも口を利く人はいない。明け方目的地に着いたらしい。その日は、十一月三日と記憶している。

隊長が、ここが我々の収容所とのことであると言つて、後方を振り向き指した。隊長の近くにソ連兵の監視詰め所らしい建物が小さくボツンと見えるのみで、四囲には建物は何もない。監視所前の門を基点に有刺鉄線が広大な原野と斜面になっている山の中腹まで張り巡らされている。これから収容所を建てて入居することにな

る。材料は附近の山にいくらでもあるという説明に言語に絶する驚きであった。ともあれ建物は何日かかるかしかないが、自分たちの寝ぐらをつくらねばと、毛布や携帯テント幕を使って除雪作業である。人員の半分は山に枯れ木とりである。チタ地区は地球上でも有数の極寒地区である。空腹も手伝って身体が凍るようだ。暖をとらねばと、たき火をやり携帯用の天幕をつないで風よけ程度のテントを張り、たき火を中央に毛布を敷き、一段落し、ホットしたときはもう夕方になっていた。飢餓と睡眠不足でだれもが困憊の極に達していた。不寝番を交替制でということにし、毛布の上に横臥したが、除雪したとはいえ凍土が体温で溶け、服は泥水で眠るなどできない。たき火も次第に凍土を残し、時間の経過とともに沈んでいく。結局一時間足らずの睡眠で、泥になった衣服の乾燥で全員が不寝番を勤めたのだった。

収容所の完成及びシラミと闘いながらの伐採

伐採作業を命ぜられた私たちは、建築がどれほどの期間で完成したかは記憶にない。

建物に入って驚いた。中央に土間があり、ドラム缶の

ストーブはよいが、平屋を三段（三階）にしたのだからたまらない。あぐらでも頭が上段に当たり、首を横に倒さねばならず極めて苦しい。さらに床は直径七、十センチぐらいの生の丸太を並べ、その上に毛布一枚敷いただけである。

四疊半ぐらいの仕切りに十二人であり、寝ると背中が痛い。まことに人間扱いではない。

加えてたき火が唯一の明りであるため、伐採時にとつた松脂を各区切り室ごとに「燃やす」からたまらない。

油煙で誰の顔も真っ黒である。だれがだれやらわからない。こんな環境を見逃すはずもなくシラミが大発生した。七月から入浴なしでシラミには好条件である。服の裏も表も縫い目に沿って透き間なく並んでいる。果ては外套の外面にまで出てきた。伐採作業中は寒いのでシラミの活動もなくよかったが夜になると動き出す。全身かゆくて眠れない。丸々と太った体格のいいシラミである。たまりかねて久しぶりに巻却絆をとって見ると、膝のところになんと小匙一杯くらいたまっていたのには自分ながら驚いた。たき火に入れるとゴマがハジケルよう

な音がしたことを覚えていた。

そして丁度その頃、戦友が四十度前後の高熱を出し、次々と倒れていった。飢餓と極寒の中での強制労働による衰弱の身であればやむを得ないが、シラミが悪疾を感染させたのであろう。だれが名づけたか知らないが、怪奇熱といわれて恐れられた。医療関係は皆無であり、自分たちとしては自分の身体から一匹でもシラミを少なくする意外に予防法はなかったのである。こうした最悪の環境の中で、朝は六時には収容所を追い出され、伐採に向かう。雪の下は湿地帯であり、凸凹が激しく足が不安定で思うように前に進めない。監視兵には、ダワイ、ブステリーと自動小銃を向けて追いたてられる毎日の往復だった。山についてもノルマを達成しなければならないと思い、直ちに作業開始である。

あるとき、夜十時過ぎにソ連将校に起こされ、理由を知らぬまま山に連行された。

それは二、三日前に伐採した赤松の切り根が高いとのこと、ソ連将校は切り直しを主張してゆずらず、五、六人で十センチほど低く切って引き揚げた。収容所に着

いたときは朝三時ごろであつたと思う。一睡もせぬまままた山に出かけた。

十一月三日、雪の中に放り出されてから六か月、伐採、自動車への積み込み、有無蓋車への積み込み等、自由勝手に酷使されたが、最後までソ連に抵抗した部隊として、武装解除後からこの時点までは、何事にせよ最も劣悪な条件のもとに置かれたと思うし、感情的にもそのように扱われた感じがしてならない。

その後私たち七十二人は、ジプヘーゲン収容所から某中尉の指揮によりハバロフスクの収容所に移り、土木、建築を主体とした多色な仕事を経験した。そして約二年、第一分所を後にダモイのうそに胸おどらせて、ナホトカに向かい、第一分所から六分所へ、ここでも土木、建築作業である。昭和二十三年以降の引揚者が多くなったが、その栈橋拡張に伴って通稱石山で採石業務、運搬埋立等々行い、二年、昭和二十四年九月二十日、帰国の途についた。

限りなき望郷の想い

静岡県 高松 又吉

北満、牡丹江駅より鉄路シベリア鉄道經由入ソ。イルクーツク地区、タイセツト着（二十年十一月十二日）、第七収容所入所、七百人の部隊であつた。部隊は混成部隊である。私たち二十四人は旧警備隊の気心の知った者たちであつた。長い貨車輸送と俘虜という心理的不安、寒さと空腹、今まで経験したことのない試練、憔悴しきつた私たちは、ただお互いの話すことといったら故郷の想いだけだった。早く帰りたい一心であつた。

輸送中のある日、バイカル湖駅に着いたとき、皆は船の汽笛を聞き、ウラジオストクに着いた、もう帰国できると勘違いして大騒ぎした想い出がある。悲しいことである。望郷の気持ちと強制抑留という不安がいろいろ、自分の意志ではどうにもならないジレンマに、心はああ！